書評

『ぼくら遊びのプロなんや』

虹の子クラブ・編　かもがわ出版
定価1500円　205頁

佐藤 弘子（協同総合研究所事務局員）

「木のぼり一番うまいやつ
かんけり一番うまいやつ
遊ぶことならまかせとけ
ぼくら遊びのプロなんや
そんじょそこらの大人には
負けへんくらい強いんや
チームワークも抜群なんや
だってだってな　そりゃそうや
ぼくら遊びの　遊びのプロー
プロー　プロなんや」

これは《虹の子クラブ》のテーマソング。

《虹の子クラブ》とは1982年に京都西陣の地に

1．安心できる質の高い子育てをしたい。
2．共働きを続けたい。
3．地域の中で交流したい。

という３つの基本的要求を掲げて開所した、保護者家族が共同出資し所有する学童保育クラブのことである。

しごく当然と思える要求を実現するために、場所捜しに奔走し、維持経費の捻出のために子どもの数の変動に一喜一憂し、指導員の確保に走り回る親たち。その10年の歩みを記念してまとめられた本誌には、《虹の子クラブ》の歴史、歳時記、そして指導員や親たちと子どもの関わりが生き生きと映しだされている。

日本のうたごえ祭典への出場キップを手にした虹の子。揃いのユニホームや整然とした合唱の出場者の中で、虹の子たちは思い思いの服装で、ドクロマークの旗と「にじのこ」のぼりを持って、「そんじょそこらの大人には負けへんくらい強いんや　ぼくら遊びのプロなんや」と歌う…というくだりでは思わず〝にやり〟としてまう。

指導員からは、――たかがと思うおやつのお皿当番の論争解決に時間をかけ、習い事に流れる子どもや親たちに対するいらだちを経て、そして高学年保育への模索――が語られる。

やる気があるのかないのはわからないような高学年の子たちとの日々の葛藤から、堪忍袋の緒をきらす指導員。そこから始めて〝自分たちで〟と立ち上がっていく子どもたち。クラブの経営維持に苦労しながらも、指導員を信頼し支えていく親たち。大人と子どもの真剣なやりとりがある。

そこには、子どものためとか、守るということでなく、子どもとの葛藤を経ながら大人たちが連帯し合い、子どもたちの領分を保証していこうとする姿勢が見える。

私ごとではあるが、かって地域に新しい児童館ができるというとき、何人かの母親たちと区の説明会にでかけたり、臨時のプレハブの建物に入っていた学童の先生や親たちとつながりをもって児童館の運営に関わっていったことがある。子どもたちが異年齢集団で遊べるような自由な空間がほしいと思う母親たちが、学童の子どもたちの遊びを見、父親もふくめた大人たちのつながりをうらやましく思い、児童館という場で関わりを持っていったともいえることがあった。

この本を読み、子どもがいきいきしているその姿の後には、必ず大人の世界の有り様が見えてくることを改めて感じた。

エピローグでは、公的要求運動への取組みを、単なる施設確保ではなく、保育者の労働条件の改善と子どもの成長を保証するような取組みとして捉え、名古屋での〝子育てコープ〟とつなげて教育文化協同組合への展望が語られている。